

# 「(仮称)教育・福祉総合プラザ」整備基本計画案に関する意見募集の結果のお知らせ

平成19年10月の1カ月間「(仮称)教育・福祉総合プラザ」整備基本計画案に対する意見などを募集しましたところ、2件のご意見を頂きました。

頂いたご意見の内容とこれに対する市の考え方は、次のとおりです。今回寄せられたご意見は、今後の進め方の参考といたします。ご協力ありがとうございました。

## ■意見内容と市の考え方

	意見の内容	市の考え方
1	(設計について) 「アピオあおもり」(注：青森市にある県立の複合施設)では、2階に廊下を兼ねたオープンスペースがあり、イスやテーブルがある。昼時はここで持参した弁当を食べている人が多い。総合プラザにもそのような場所があるとうれしい。	具体的にご提案ありがとうございます。ご提案のように、整備する施設には、利用者がくつろげるスペースが必要であると考えます。 今後、設計者が特定された後の基本設計作業では、今回のご意見も含めて、利用団体の皆さんなどからご意見を伺いながら、施設内容を具体化して参ります。
2	(運営について) 「アピオあおもり」では、定期的に施設のイベントカレンダーや講座案内、ライブラリ情報などを郵便で案内している。このような情報提供の仕方などが利用者数や利用率に関わると思う。また、市民の代表者などによる運営委員会も必要ではないだろうか。	「市民に長く愛されること」、「市民が主体的に関われる運営を目指すこと」は、管理運営に関する基本的な考えとして特に重要です。ご提案のような情報提供サービスや市民による運営委員会といったアイデアは、利用者の要望を満たすために必要と考えます。ご提案の主旨は、今後の管理運営計画の立案などに反映させるよう努力して参ります。



アピオあおもり2階オープンスペース

問い合わせ先  
企画調整課(☎@5111内線167)

## 芸術文化ゾーンだより ①6 ～作品紹介⑤マリール・ノイデッカー～

市で整備を進めている野外芸術文化ゾーンについての話題を紹介しています。

先月紹介した、エレエロが描いた階段室を昇ると、2階はドイツ出身の女性作家、マリール・ノイデッカーの部屋になっています。

ノイデッカーは1965年生まれ、現在はイギリス在住。雪や霧、山脈など大地のランドスケープ(景観)をジオラマ状に再現させる作品で知られています。そのロマンティックな風景は、母国ドイツで19世紀前半に流行したドイツロマン主義(代表的作家として、人跡未踏の山岳や廃墟などをモチーフとしたフリードリヒなど)を彷彿とさせる美しく、壮大なものです。また、ビデオ作品も手がけており、イギリスとドイツで同時刻に日没と日の出を撮影し、地球という巨大なランドスケープの中で、時間の流れを表現した作品などを制作しています。

当現代美術館では、林立する木々の間から淡い光が差し込む幻想的な風景を室内に作り出します。作品は奥行き10メートル、幅6メートル、高さ5メートルとなる巨大なもので、実際の森に迷い込んだのかと錯覚するほど



マリール・ノイデッカー「闇というもの。」  
“This Thing Called Darkness.”  
Copyright Mariele Neudecker, Courtesy Galerie Barbara Thumm, Berlin

の大きさです。自然を目の当たりにした際に抱く、感情や印象を想起させるものとなっています。

ノイデッカーの作品は日本ではまだまだあまり発表されていませんが、2001年横浜トリエンナーレ(3年に1度開催する国際芸術展)に、巨大な山脈のジオラマを水槽に浮かべた作品、「想い出せない今」を出展しています。

問い合わせ先 企画調整課(☎@5111内線162)